九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中国語を母語とする日本語学習者の漢語・漢字語習得研究の概観 ： 母語の影響、転移を中心として

藤山, 智子
九州大学大学院比較社会文化学府

https://doi.org/10.15017/4494711

出版情報：比較社会文化研究. 30, pp.109-116, 2011-09-15. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

『比較社会文化研究』第30号（2011）109～116
Social and Cultural Studies
No.30（2011），pp. 109～116

中国語を母語とする日本語学習者の漢語・漢字語習得研究の概観

― 母語の影響、転移を中心として ―

藤山智子（フジヤマ サトコ）

1．はじめに

宮島（1958）による日本語の語彙種の統計調査では、全体の53.6％が漢語で、続いて和語36.6％、和漢熟語[1] 5.7％、外来語3.5％となっており、漢語の理解が日本語の学習にとって非常に重要であることがわかる。また、和語と漢語の組み合わせで作られた和漢熟語も表記は漢字であり、「美しい」「等しい」などの和語も語の意味を担う中心的な部分が漢字で表記されることを考えると、内容語の理解のほとんどに漢字の理解が関わっているといえる。

日本語に多くの漢語や漢字を含む語彙が存在することは、母語の表記に漢字を用いる中国語圏の人々[2]が日本語に親しみを感じる要因であり、学習を進める上で他の母語話者より有利な点である。日本語を学習する中国語母語話者の多くが、「漢字があるから勉強しやすい。」「漢字があるから大体意味が分かる。」と言い、事実日本語能力試験の１級合格者の多数を中国語圏の学習者が占めている。

しかし、一方で母語の漢字の知識が漢字以外の言語知識の使用を妨げる可能性や（Hatasa, 1992）、日本語の漢字語を母語の知識に頼ることで間違った意味に解釈する危険性など（陳2009）日本語の学習を妨げる側面があるということも報告されている。

本稿は、中国語母語話者の日本語の学習に母語の漢字の知識がどのように影響するのか、先行研究による知見をまとめ、解明された点と解明されていない点を明確にし、今後の研究方向を検討することを目的とする。

2．漢語、漢字語の定義

日本語の語彙を出自により大きく分類すると、和語、漢語、外来語の３種に分けられる。和語は日本固有のものと考えられる単語（例：山、動くなど）、外来語は主に西欧語から入ってきた借用語のうち、日常的に使われるようになった語（例：ガラス、ノートなど）である。漢語は元々中国語からの借用語を指したが、現在では漢字音読語とする見方と、漢字熟語とする見方がある。前者は「見学、起立、着席」など漢字音で読まれる中国語由来の語と、「大根、火事、返事、発見」のような和製漢語である。後者は前者に加え、「手帳、夕飯」、「自前、番組」のような重箱読みや湯桶読みの漢字熟語[3]や訓読漢字熟語（人気など）も含む[4]。

日本語教育に関わる研究分野では、日本語の漢語と中国語の対応関係をまとめた文化庁（1983）が、訓読語も入れると日中で対応しないものが多くなるという理由から、漢語を漢字音読語と定義している。陳（2003）は二字、また二字以上の漢字で構成される漢語と定義し、例に「当然、山田、火事、受入」などを挙げている。文化庁の分類をベースに研究を行った安（1999）、加藤（2005）、は文化庁（1983）に従い、漢語を漢字音読語としている。同じく、文化庁の分類をベースにした陳（2009）は漢字音読語を漢語、それ以外の漢字表記される語を漢字語としている。

本稿では先行研究にならい、漢語を漢字音読語と定義する。それ以外の漢語、和語、混種語で漢字表記されるものと、表記に漢字を含むものを漢字語とする（表１を参照）。先行研究を直接引用する場合は先行研究の記述に従う。

表１　漢語、漢字語の例

漢語、漢字語の別	定　義	例
漢語	漢字音読語	見学、起立、重要
漢字語	和語	買う　美しい
	漢字訓読語	小柄　勝手　下手
	湯桶読み	強気　弱気
	重箱読み	気軽　無口
	混種語	大雑把　意地悪

3．漢語、漢字語習得研究の研究分野

中国語母語日本語学習者の漢語、漢字語習得に関わる研究は、主に第二言語習得研究の日中漢語対照研究、誤用分析、中間言語研究の枠組みや、認知心理学の分野で

行われている。

3．1　日中漢語対照研究

日中漢語対照研究の概観は陳（2003）に詳しく、日中の意味的対応関係に基づく漢語の分類、分類に基づいた意味的・用法的差異の対照研究、教育への応用、由来構造に関する研究などに分けられ、詳細にまとめられている。

本稿では習得に関わる母語の影響という視点から先行研究を概観するので、言語的な差異のみを研究対象とするものは除外する。しかし、日中の意味的対応関係に基づく漢語の分類は学習者に与える影響を左右する要因として、漢語習得研究で用いられるので、本稿でも概観の対象とする。

3．1．1　日中の対応関係による漢語の分類

日中の対応関係による漢語の分類研究の中心となるのは文化庁（1983）である。日本語を学習する中国人が増える中で、母語の知識を日本語の学習に生かすことができるようにと、初級、中級で扱われる漢語2,000語の語形と意味について中国語との対応を調査した。語形と日中辞典、中日辞典の記述を対照した結果、「日中両国語における意味が同じか、または、きわめて近いもの」（same：以下S語）、「日中両国語における意味が一部重なってはいるが、両者の間にずれのあるもの」（overlap：以下O語）、「日中両国語における意味が著しく異なるもの」（different：以下D語）、日本語の漢語と同じ漢語が中国語に存在しないもの（nothing：以下N語）の４種類に分類された。S語は全体の３分の２、N語は４分の１を占めた。O語とD語は全体の１０分の１以下であった。

文化庁（1983）に対しては分類の誤りの指摘や、異なる辞書を参照した一部の分類の再検討や、台湾人学習者の視点からの問題点の指摘など様々な批判がある（荒川1979、飛田・呂1983、大塚1990、林2002）。しかし、日中の漢語の４つの対応関係は、基本的な分類として受け入れられている。

文化庁（1983）の４分類の枠組みを再検討したのは三浦（1984）と陳（2009）である。三浦は日中で一部意味が重複するO語を、意味の包含関係により下位分類することを提案した。日中それぞれに独自義があるもの（例：機関、交際）、日本語のほうが意味範囲の広いもの（例：意識、演習）、中国語の方が意味範囲の広いもの（例：意見、解決）の３つである。日中の対応に、より詳しい情報が加えられることになった。

陳（2009）は中国語母語日本語学習者の視点から、O語を母語話者による意味使用の一般性から、N語を意味推測可能性から再分類し、文化庁の４分類を６分類にすることを提案している。意味使用の一般性とは、１語が持つ複数の意味のうち最も一般的に使われる意味ということで、日中双方、または片方が多義語の場合でも、一般的に使われる意味が一致していれば、意味の理解や習得はそんなに難しくなく、一致しない場合は学習に注意を要するということである。意味推測可能性とは、中国語に対応する漢語がなくても、漢字から正しい意味の推測が可能であれば注意を払う必要がなく、正しい意味の推測が困難であれば注意して学習する必要があるということである。

対照研究による知見は、言語間の異同から学習の困難度を予測するのに役立つが、多くの場合実際に検証してみないと、どんな違いがどんな理由で難しいのかは分からない。その中で学習者の視点から困難さの具体的な理由を盛り込んだ分類を行った陳（2009）は、分類の有用性を一歩進めたといえる。

文化庁（1983）と三浦（1984）の分類は他の研究で難易度の検証が試みられている。

表２　陳（2009）の分類　（陳，2009より転載）

漢字語種類	中国語	日本語	共通の意味の使用の一般性の一致／不一致	漢字からの意味推測	例	文化庁／三浦との対応
Same	m1 (m2)	m1 (m2)	一致		理想 露骨	Same
Overlap①	m1 (m2)	m1 (m2)	一致		解決 現金 単位	Overlap Ⅰ Overlap Ⅱ Overlap Ⅲ
Overlap②	m1 (m2)	(m1) m2	不一致		入手 上品 下手	Overlap Ⅰ Overlap Ⅱ Overlap Ⅲ

Different	m1 φ	φ m2	不一致		学長勉強	Different
Nothing①	φ	[m1] (m2)		可能	既婚	Nothing
Nothing②	φ	[m1] (m2)		困難	我慢	Nothing

注１：四角で囲ったものは使用一般性の高い意味。mは意味。複数の場合はm1，m2と示す。
　　同じ番号は同じ意味を示す。
注２：(　)の意味は中国語，日本語のどちらかが欠落する場合がある。

３．２誤用分析

学習者の誤用はCorder (1967) によって、学習者に関する重要な情報を提供する鍵であるとされ、研究対象として取り上げられるようになった。中国語を母語とする日本語学習者の誤用は作文に現れる漢語の誤用を中心に母語の転移という観点から研究されている。

張 (2009) は中国語母語日本語学習者の作文に見られる漢語の誤用を母語の転移という観点から分析した。分析対象は文化庁 (1983) のS語とO語に当たるものと、中国語にしかない単語である。N語とD語が外された理由を、前者は母語にはないので転移は起こらない、後者は学習者が日中の違いに気づきやすいので転移が起こりにくいからだとしている。

分析の結果、誤用のタイプは①中国語にしか存在しない語彙の転移、②O語における中国語の意味の転移、③S語とO語における中国語の単語の品詞性の転移、④中国語の単語のイメージの転移（母語の完全な転移とは言えないが、母語の発想を目標言語の単語や形態素に結びつけて使用したと考えられるもの）の４種類に分類された。

誤用分析は学習者による産出データを研究対象とするもので、受容の側面を見ることの多い実験的な研究では分からない部分が明らかになることもある。しかし、学習者が使用を回避した項目に関してはデータが得られないことや、複数考えられる誤用の原因を特定できず、単なる誤用の分類の記述に過ぎなくなることに対する批判もよく聞かれる。張 (2009) で分析されている誤用に関しても、S語やO語の使用は学習者が日本語の語彙であることを分かっていながら言語能力が不十分で起きた誤用なのか、日本語にない中国語の完全な借用と同様、単に中国語の単語を利用したら、偶然日本語にもある単語だったのか不明であり、同じような誤用をした被験者が同じ理由で間違ったかどうかも分からない。誤用分析の不十分さに関しては張 (2009) 自身も述べており、誤用の理由を考察し、実証する必要を述べている。

３．３　Ｌ１知識の転移、干渉に関する実証研究

中国語を母語とする日本語学習者の母語の漢字の知識が日本語の学習や、中間言語の変化にどのような影響を与えるのか、実験的な手法を用いて検証しようとする試みは1990年代頃からアメリカで見られるようになった (Hatasa, 1992、Matsunaga, 1999、Chikamatsu, 1996、Mori, 1998など)。また、2000年頃からは日中の漢語の対応関係による日本語の習得困難度の検証が、数は少ないが行われている。

Hatasa (1992) は、中国語母語話者は日本語の理解に母語の漢字知識を利用するのか、するとしたら日本語の習熟度（初級、中級、上級）や学習内容（漢字、読解、文法）によって違いがあるのかを漢字テスト、読解テスト（かな版、漢字かな交じり版）、文法テスト（かな版、漢字かな交じり版）によって検証した。漢字テストの得点に影響した主要因は母語の漢字知識で、つづいて日本語の習熟度であった。文法テストは習熟度のみが要因であった。読解テストは被験者全体では英語母語話者より中国語母語話者の成績が上回ったが、最も影響したのは日本語の習熟度で、続いて母語の漢字知識であった。習熟度別にみると、中級では中国語母語話者の成績が英語母語話者を有意に上回ったが、初級と上級では有意差はなかった。初級から上級にかけての成績の上昇は中国語母語話者が英語母語話者より小さく、両者の上級の成績差は非常に小さかった。これらの結果から、筆者は母語の漢字の知識が日本語の読解に有利なのは、学習の初期の段階だけだと述べている。

研究全体のまとめとして、①転移は学習の目的によって異なる、②中国語母語話者は漢字の知識を習熟度に関係なく一貫して同様に利用している、③母語知識の転移の有効性は習熟度によって異なる、④読解力の向上は必ずしも漢字の知識増加に繋がらない、の４点を挙げている。

学習者の中間言語は目標言語に向かって仮説と検証を繰り返しながら、常に変化していくと考えられているが

Hatasa (1992) の被験者にはそのような発達段階による変化が見られなかった。中国語母語話者が初級から上級まで母語の漢字知識を読解ストラテジーとして同様に使い続けることは、漢字の意味理解以外の言語知識の使用を妨げているのかもしれないと筆者は述べているが、漢語や漢字語などを日本語の語彙として理解せず、一貫して漢字からの意味の類推や解釈だけを続けている可能性もあるのではないだろうか。

Matsunaga (1999) もL1の漢字知識と読解の関係について調査を行い、文章の種類(手紙文、物語文、説明文)による違いと、聴解、口頭能力との関係を検証した。漢字、漢語を多く含む説明文に関しては口頭能力が同じでも漢字の知識をもつグループは読解力が理解、スピードの面で勝っているが、漢字の知識のあるなしに関わらず、日本語の読解力の構築には口頭発話能力と日本語の漢字語彙を日本語の音で捉える能力が必要であり、L1からの漢字知識に対する過剰依存を看過しないことが重要であると述べている。

Mori (1998) は文字の記憶ストラテジーに対するL1の表記形態の影響を調べた。アルファベットを用いる米国人学習者は音声的手がかりに大きく依存し、韓国と中国の被験者は音声や形態など様々な手がかりを利用していることが伺えた。またChikamatsu (1996) は、視覚情報による語彙認識ストラテジーでも、米国人被験者は音韻情報を積極的に活用し、中国人被験者は視覚情報に大きく依存していることが報告されている。

日本で行われている中国語母語話者の漢語習得に関する研究は文化庁分類の難易度を検証しようとしたものである。

安 (1999)、加藤 (2005)、は日中で対応する漢語のタイプによる習得困難度を検証した。対応の枠組みは文化庁 (1983) と三浦 (1984) が用いられている。

安 (1999) は日本語の漢語の習得に母語の知識が及ぼす影響を韓国語母語話者と中国語母語話者で比較しているが、未知語の意味推測に韓国語母語話者は母語の韓国語の知識を利用し、中国語母語話者は中国語の知識よりも、構成要素の漢字から意味を推測しようとしたことが明らかになった。

加藤 (2005) は 中国語母語日本語学習者の日本語の漢語の習得に、日中の漢語の意味的対応の違いが与える影響を正誤判断テストにより調査した。対応関係は文化庁 (1983) と三浦の分類に基づくS、D、O(日＜中：中国語の意味範囲が広いもの)、O (日＞中：日本語の意味範囲が広いもの) とN1 (意味推測可能)、N2 (意味推測不可能) である。Sは正の転移により未知語であっても意味が推測できること、Dは初級では負の転移がおこるが、負のフィードバックを受けることが多く、上級になると正しい日本語の知識が身に付くこと、N1は正の転移がおこりやすく、N2は転移自体がおこりにくいということが明らかになった。Oは上級でも正確な語義が習得できない場合があり、習得が困難であることが分かった。

学習者の受容知識を調査した加藤 (2005) の結果を陳 (2009) の分類と併せて考えると、日中同形同義のS語は易しい。D語は同形異義なので初級の間は困難だが正確な語義が学習される可能性が高く、習熟度が高くなるとちゃんと習得される。N語は異形意義だが漢字から意味推測が可能なら正の転移が起こりやすく、意味推測が不可能なら転移自体が起こらない。O語に関しては加藤 (2005) では習得が難しいという結果しか得られなかったが、陳 (2009) の意味の使用一般性が一致する語であれば正の転移に、不一致であれば負の転移になる可能性が考えられる。

さらに、張 (2009) による産出データの結果と対照すると、D語が正確な語義の習得により、誤用が起こらなくなるという点は一致する。S語に関しては受容面では全く問題にならないが、産出では負の転移の可能性があるという全く反対の現象が起こるようである。またN語に関しても張 (2009) は中国語に存在しないので転移が起こらないとしているが、加藤では意味推測が可能な一部のN語では正の転移が起こると述べており、受容と

表3　日中の漢語の対応関係が受容と産出に与える影響

<table>
<tr><td>文化庁 (1983) を元にした陳 (2090) の枠組み</td><td>加藤 (2005)</td><td>張 (2009)</td></tr>
<tr><td>Same</td><td>正の転移</td><td>負の転移 [品詞]</td></tr>
<tr><td>Overlap①</td><td rowspan="2">負の転移</td><td rowspan="2">負の転移 [意味，品詞]</td></tr>
<tr><td>Overlap②</td></tr>
<tr><td>Different</td><td>負の転移→正用</td><td>負の転移→正用</td></tr>
<tr><td>Nothing①</td><td>正の転移</td><td rowspan="2">転移なし</td></tr>
<tr><td>Nothing②</td><td>転移なし</td></tr>
</table>

＊[　　] は負の転移が起こる対象

産出で異なる傾向がある。O語は張（2009）でも意味や品詞で負の転移が起こっており、習得が難しいことは受容、産出の両面で一致する。しかし、陳（2009）の意味使用の一般性の一致、不一致が影響するのかどうかは不明である。表３は以上の対照をまとめたものである。

これらの語が日本語の語彙として習得されるかどうか、という観点から考察すると、D語（Different）は学習初期の誤った理解や誤用に対して負のフィードバックを受けながら、学習者も注意深くなり、意味や用法などの知識が身に付き習得が進むと考えられる。また意味推測が不可能なN語（Nothing②）も中国に存在しない上に意味の推測もできず、日本語の語彙としての習得が進む可能性が高い。O語（Overlap①、Overlap②）は日中で一部意味が重複し、その包含関係が一様でないことから、まず意味の理解に学習者は混乱し、よって運用に関する知識も身に付きにくいのではないかと考えられる。理解では母語の知識が正の転移となるS語は母語の知識で意味理解できることが、母語との違いに対する注意をおろそかにし、日中で異なる語彙知識の側面の発達を妨げ、運用面での誤用に繋がっている可能性がある。意味推測が可能なN語（Nothing①）にもS語ほどではないが、同様の傾向が見られるのではないだろうか。

3.4単語認知処理

近年、認知心理学や第二言語習得研究の分野で日本語と中国語のバイリンガルの認知処理に関する研究がさまざまな角度から行われている。単語を認知する際に、ターゲット語の意味表象だけでなく、ターゲット語と関連する語義も活性化し、単語認知に促進効果や干渉効果を及ぼすことが分かっており、中国語母語話者の日本語の漢字処理や、字形と字義が共通の同根語[5]処理も母語の影響を受けることが予測されるからである。研究対象は形式と意味のマッピング、処理ルート、音韻処理、意味処理、単語処理に文文脈が与える影響などである。実験パラダイムは命名課題（読み上げ課題）、語彙判断課題、プライミング効果、翻訳課題などが用いられ、分析の対象となるのは主に反応潜時と誤答率である。

邱・松見（2007）は台湾人日本語学習者が形式と意味のマッピングに用いるストラテジーを直後意味再生テストと一週間後の遅延テストにより検証した。調査対象語彙は漢字語彙、漢字仮名交じり語彙、平仮名語彙の３種であった。漢字を含む語彙はL1からの連想が難しいものを選んだ。調査の結果、直後テスト、遅延テスト共に、漢字語彙の再生率が最も高く、漢字仮名交じり、平仮名の順になった。台湾人日本語学習者は母語の漢字知識から意味推測が難しい語彙であっても、母語の漢字知識を利用して記憶していることが伺われた。

邱學瑾（2002a）は台湾人日本語学習者の漢字熟語の処理過程が、日中の語彙の対応関係により異なるのかをカテゴリー判断課題により検討した。心内辞書への単語アクセスは形式から意味に到達する直接ルートと、形式から音韻を経て意味に到達する音韻媒介ルートの２つが考えられている。バイリンガルの単語アクセスは２言語間の語彙関係により、母語の音韻を媒介するルートも考えられる。実験の結果、台湾人日本語学習者の同根語処理は日本語の音韻を媒介せず、形態から意味への直接処理か、或いは中国語の音韻を媒介するルートが取られることが示唆された。一方、非同根語は形態情報と音韻情報の両方が関与してアクセスされることが分かった。同様の課題を漢字圏学習者と非漢字圏学習者の比較で検討した邱學瑾（2002b）でも同様の結果が得られ、漢字圏である韓国語母語話者の処理ルートは台湾人学習者と同様であることがわかった。非漢字圏学習者は日本語の音韻を媒介して処理をしていることが確認された。２つの研究から、母語の漢字の知識は日本語の処理に影響を及ぼすことが示唆された。

茅本（2000、2002）は中国語母語話者の日本語の音韻処理に与える母語の影響を、漢字１字と漢字語で検討した。茅本（2000）では、日中の漢字の音韻類似性が日本語の音韻処理に影響するのかを検証するために、読み上げ課題を行った。結果は上級学習者では日本語の音韻処理に母語の音韻情報が活性化されているが、超上級になると音韻類似性の影響が見られなくなり、日本語と中国語の心内辞書が分離されていることが示唆された。

つづいて茅本（2002）では、中国語母語話者の日本語の漢字語処理が日中の形態、音韻、意味の面で類似している場合と、していない場合でどのように違うのか、語彙判断課題（実験Ⅰ）と命名課題（実験Ⅱ）によって調査された。語彙判断課題では意味の似ているものと形態が同じものが速く判断された。命名課題では音韻の似ているものと意味の似ている物が速く読まれた。意味の情報は課題の種類によらず、活性化されていることが分かった。また音韻情報は最終出力が音韻情報を必要とする場合のみ重要であることが分かった。被験者である上級の中国語母語日本語学習者は漢字語を認識したり読んだりするときに中国語の漢字の情報を活性化させていることが示唆された。

邱學瑾（2003）は台湾人日本語学習者の日本語の漢字熟語の音韻処理を、日中の語彙対応関係（同根語・音－非同根語、訓－非同根語）、被験者の習熟度、単語の習得年齢の３つの面から、読み上げ課題によって検討した。同根語と非同根語の結果を比較すると、同根語は非

同根語より反応時間が長く、形態と音韻の連結強度が弱いことが伺えた。また、単語の習得時期との比較から、同根語は非同根語より日本語音の定着が遅い事が明らかになった。台湾人日本語学習者の日本語経験の長さが、処理速度の違いを解消していないのは、台湾人日本語学習者が黙読中に同根語を日本語音を媒介せず意味アクセスしており、同根語の形態と日本語音との連結強化を阻害しているからだと考えられる。この結果は茅本(2000)の超上級になると音韻類似性の影響が見られなくなり、日本語と中国語の心内辞書が分離されていることが示唆されたという結果と反対であるが、調査語が漢字１字と日中で形態的にも意味的にも対応がある同根語との違いによる可能性もある。

邱兪瑗 (2007) は邱學瑾 (2003) の課題を音声理解面から検証した。日本語の単語の音韻表象と意味表象の連結強度が同根語、非同根語、ひらがな単語、カタカナ単語の違いによって現れるのか、聴覚提示の語意性判断課題によって調査した。日本在住の台湾人日本語学習者は同根語と非同根語の処理速度に違いがなかった。台湾在住の日本語学習者は高頻度の同根語の処理が非同根語より長く認知速度が遅いことがわかった。低頻度語の非同根語に関しては同根語より反応時間が長く認知速度が遅いことがわかった。JFL環境の学習者は日本語単語の音韻と意味の連結強度が弱く、同根語や使用頻度の低い非同根語の認知速度が遅くなったと考えられる。

意味の処理は蔡・松見 (2009) が言語間プライミング法による語彙性判断課題によって検討した。中国語母語日本語学習者を対象に、プライム刺激の中国語とターゲット語の日本語を連続提示し、ターゲット語が日本語の単語であるか判断する課題を行った。実験の結果、プライム語が同根語か非同根語かによって結果が異なり、同根語は日中で語彙表象が共有されているのに対して、非同根語は語彙表象が分離独立して構築されていると示唆された。

また、小森・玉岡・近藤 (2008) は日中同形単語が中国語母語日本語学習者の単語処理に影響を与えるか、正誤判断課題によって検討した。刺激文が日本語として意味が通る正しい文かを判断する課題で、日中同形類義語や日中同形異義語が埋め込まれた否定反応が正答の課題で、中国語母語話者は反応時間が長く、誤答率も高いことが示された。この結果は習熟度に関係がなかった。日本語にはない中国語義が形態類似性により活性化され、日本語の意味判断に影響を与えたと考えられる。同形類義語と同形異義語の比較では前者の方が反応時間が長く、習得が困難であることが示唆された。

以上をまとめると、中国語を母語とする学習者の同根語処理は形式→意味か、形式→中国語音→意味の経路をとり、漢字語の音韻処理の際、中国語の漢字情報が活性化する。同根語の音韻処理は習熟度が高くなっても速度が遅く、日本語音との連結の弱さが伺える。意味処理の側面から見ると、非同根語は語彙表象が日中で分離しているが、同根語は共有されている。一つ一つの研究の結果がどのように繋がるかは分からないが、同根語に関して中国語母語話者は母語の漢字知識の影響を強く受けており、同根語の処理ルートに日本語音が介在しないことや、同根語の語彙表象が日中で共有されているということからは、同根語はほぼ中国語として処理されている可能性も考えられる。また、O語は理解、産出の面で負の転移が起こったが、処理においても困難であることが確認された。またD語も処理では母語の干渉を受け、習熟度が高くなっても解消されないことが分かった。

4．まとめと今後の課題

以上、中国語母語話者による日本語の漢語・漢字語の習得に関する研究を概観した。ここから分かったことは①日中の漢語の対応関係により中国語母語日本語学習者の日本語漢語の理解、産出、処理が受ける影響は異なる、②同根語、同形類義語、同形異義語の処理は母語の知識に影響され、日本語音の定着が遅くなったり、中国語義の干渉を受けたりする。③母語の知識は理解では正の転移となっても、産出では負の転移となることがある、等である。邱學瑾 (2010) は認知処理で母語の影響が消失しないことについて、漢字語彙の理解 (意味) に焦点をあてた教室活動や自習活動に対する学習ストラテジーが関与していると述べているが、Hatasa (1992) でも漢字知識の読解ストラテジーとしての利用が上級の学習者にマイナスの影響を与えている可能性を指摘している。中国語母語話者にとって日本語の漢字は意味の理解を容易にする便利な道具であるが、そのことが音韻や統語など意味以外の語彙知識の習得に目を向ける機会を奪い、語彙知識の発達を妨げているかもしれない。

今後は中国語母語日本語学習者の日本語の漢語の知識が日本語の語彙として発達しているのかどうか、他の母語話者とは異なるのか、日中の語彙の対応関係によって違いがあるかという点から、考えてみたい。

【参照文献】

大塚秀明 (1990)「日中同形語について」『筑波大学外国語教育論集』12, 327-337

荒川清秀 (1979)「中国語と漢語－文化庁『中国語と対

応する漢語』の評をかねて」『愛知大学文学論叢』62, pp.1-28
安龍朱 (1999)「日本人学習者の漢語の意味の習得における母語の影響について—韓国人学習者と中国人学習者を比較して」『第二言語としての日本語の習得研究』3, pp.5-17
加藤稔人 (2005)「中国語母語話者による日本語の漢語習得 ——他言語話者との習得過程の違い——」『日本語教育』125, pp.96-105
茅本百合子 (2000)「日本語を学習する中国語母語話者の漢字の認知——上級者・超上級者の心内辞書における音韻情報処理」『教育心学理学研究』48, pp.315-322
茅本百合子 (2002)「語彙判断課題と命名課題における中国語母語話者の漢字アクセス」『教育心理学研究』50, pp.436-445
邱學瑾 (2002a)「台湾人日本語学習者における日本語漢字熟語の処理過程——日・中2言語間の同根語と非同根語の比較——」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部 15, pp.357-365
邱學瑾 (2002b)「漢字圏・非漢字圏日本語学習者における漢字熟語の処理過程－意味判断課題を用いた形態・音韻処理の検討－」『教育心理学研究』50, 412-420
邱學瑾 (2003)「台湾人日本語学習者の日本語漢字熟語の音韻処理について——単語タイプ・単語の習得年齢・習熟度の観点からの検討——」『日本語教育』116, pp.89-98
邱學瑾 (2010)「日本語学習者の日本語漢字語彙処理のメカニズム——異言語間の形態・音韻・意味の類似性をめぐって——」『日本語教育』146, pp.49-60
邱兪瑗 (2007)「台湾人日本語学習者における日本語単語の聴覚的認知——同根語・非同根語・ひらがな単語・カタカナ単語の比較——」『日本語教育』132, pp.108-117
小森和子・玉岡賀津雄・近藤安月子 (2008)「中国語を第一言語とする日本語学習者の同形語の認知処理——同形類義語と同形異義語を対象に——」『日本語科学』23, 81-94
蔡鳳香・松見法男 (2009)「中国語を母語とする上級日本語学習者における日本語漢字単語の処理過程－同根語と非同根語を用いた言語間プライミング法による検討」『日本語教育』141, pp.14-24
張麟声 (2009)「作文語彙に見られる母語の転移 ——中国語話者による漢語の転移を中心に——」『日本語教育』140, pp.59-69
陳毓敏 (2003)「中国語を母語とする日本語学習者における漢語習得の概観——意味と用法を中心に—」『言語文化と日本語教育』2003年11月増刊特集号 pp.98-113
陳毓敏 (2009)「中国語母語学習者の日本語の漢字語習得研究のための新たな枠組みの提案——意味使用の一般性と意味推測可能性を考慮して——」『日本語科学』25, pp.105-117
飛田良文・呂玉新 (1983)『中国語と対応する漢語』を診断する」『日本語学』6月号 pp.72-85
文化庁 (1983)『中国語と対応する漢語』大蔵省印刷局
三浦昭 (1984)「日本語から中国に入った漢語の意味と用法」『日本語教育』53, pp.102-112
宮島達夫 (1958)「近代日本における単語の問題」『言語生活』79, 17-26
林玉惠 (2002)「日華・日漢辞典からみた日中同形語記述の問題点——同形類義語を中心に——」『世界の日本語教育』12, 107-121
Chikamatsu, N (1996) The Effects of L1 Orthography on L2 Word Recognition : A Study of American and Chinese Learners of Japanese. *Studies in second Language Acquisition* 18: 403-32.
Coder.S.P. (1967) The significance of learners' errors. *International Review of Applied Linguistics*, 5. 161-170
Hatasa, Y.A. (1992) Transfer of the Knowledge of Chinese Characters to Japanese.Ph. D. diss.University of Illinois, Urbana-Champaign
Matsunaga, S (1999) The Role of Kanji Knowledge Transfer in Acquisition of Japanese as a Foreign Language『世界の日本語教育』9, 87-100
Mori,Y. (1998) Effects of First Language and Phonological Accessibility on Kanji Recognition *The Mordern Language Journal* 82:69-82

註

[1] 混種語に同じ

[2] 中国語圏とは中国，台湾，香港など中国語が用いられる国と地域を指す。

[3] 和漢混交の漢字熟語　湯桶読み　重箱読み

[4] 『大辞林』による

[5] 同根語は元々フランス語とイタリア語など同族語内で字形・字義が一致する語彙をさすが，ここでは日中で字形・字義が一致する語彙を指している。同形同義語

Research on Acquisition of Japanese *Kanji* Compound Words and *Kanji* Words by Native Speakers of Chinese

Satoko, FUJIYAMA

It is very important to understand Kanji to learn Japanese, because more than half of Japanese words are Kanji compound word and even Japanese original words contain kanji in part of it orthograph ically. Chinese learners are at an advantage because they use Kanji in their native language, however some researchers reported negative transfer from Chinese learners Kanji knowledge to Japanese acquisition. The purpose of this study is to review past studies of Kanji compound word and Kanji word acquisition in Japanese language by Chinese learners of Japanese lauguage and to reveal the features of Japanese Kanji compound words and Kanji words which transfer negatively. In addition the problems and limitations of previous studies are revealed, and possible future directions of studies are discussed.